事例３　歴史的事象ついて、その理由・背景に着目して考察させる授業

１　ねらい

この事例では、歴史的事象の理由や背景についての問いかけを中心に授業を組み立て、発問に対する考察や仮説を記述させる学習活動を反復して行うことにより、歴史を原因と結果のつながりとして捉え、歴史的事象を歴史的文脈の中で理解する力を育成することを目指した。

歴史的思考力の育成の重要性が指摘されるようになって久しいが、授業の場では、生徒に考えさせる課題追究的な学習活動が十分に取り入れられているとは言えない状況が続いている。その原因の一つとして、課題追究学習は、多くの授業時数や教師の膨大な準備を必要とするものと捉えられてきたため、容易に取り入れにくかったことがあったのではないかと考える。

このようなことから、この事例では、普段の授業の中で、生徒の関心を喚起し知的好奇心を刺激するような発問を繰り返すことによって、生徒の思考を促し、歴史的思考力の育成を図ることをねらいとした。なお、授業実践は第２学年を対象に行った。

２　指導計画・評価計画

(1) テーマ全体の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
歴史的事象の理由や背景について考察することに、積極的に取り組んでいる。	教科書や資料集等を活用して歴史的事象の理由や背景について考察している。	教科書や資料集等を適切に活用し、考察したことを自分なりに表現している。	原因と結果のつながりから成る歴史の展開を理解し、基礎的な知識を身に付けている。

(2)テーマの実践計画

①宋の成立

文治主義を実施した時代背景と、文治主義のもたらした功罪について考察することを通して、北宋前半の政治史の展開を理解する。

②東西の文化交流（モンゴル帝国）

キリスト教諸国がモンゴル帝国へ使節を派遣した理由について考察する。

③イスラームの成立と発展

ムハンマドが短期間でアラビア半島を統一できた理由について考察する。

④フランク王国の成立と発展

フランク王国発展の要因について、ローマ教会と結び付けて考察し、理解する。

３　授業実践

実践１　宋の成立

(1)本時の目標

文治主義を実施した時代背景と、文治主義のもたらした功罪について考察することを通して、北宋前半の政治史の展開を理解する。

(2)本時の指導計画・評価計画

段階	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価計画 〔評価方法〕
導入	5分	○五代十国時代の確認 ・五代の諸国がなぜ短期間に興亡を繰り返したのかを確認する。		
展開	40分	○宋の文治主義 ・文治主義の特徴とそれが実施された理由を考察する。 《発問①》節度使の権限を縮小したのはなぜか。 《発問②》科挙に殿試を追加したのはなぜか。 ・自分の考えをノートに記入し発表する。	・導入で確認した前時代の状況を踏まえて考えるように促す。 ・自分の考えをノートに記した後、近くの人と相談して考えを発展させ、発表させる。 ・考察結果を皇帝独裁体制の成立と結び付けて説明する。	・五代十国時代の状況を踏まえて、宋の文治主義について考察している。 【思考・判断】 〔ノート、発表〕
		○宋の対外関係 ・文治主義の問題点を考察する。 《発問③》軍隊は敵の侵入を防ぐことができるか、できないか。またその理由。 《発問④》自分だったら敵（北方民族）にどのような提案をして乗り切ろうとするか？ ・自分の考えをノートに記入し発表する。	・軍事的に劣る宋は、どのような対応をして乗り切ろうとするか、自分が宋の政治家であればどのような提案をするか考えさせる。 ・生徒の発言のうち、実際に宋王朝が採用したものを指摘し、澶淵の盟について説明する。	・文治主義の結果、軍事力が弱体であった宋が、北方民族にどのように対応したか、自分なりに考えて表現している。 【思考・判断】 【資料活用の技能・表現】 〔ノート、発表〕
		○宋の財政難打開策 《発問⑤》今まで以上にお金やものが必要になったことにより、どんな問題が起きたか。 《発問⑥》財政難に対処するために、自分ならどんな政策を実施するか。 ・自分の考えをノートに記入し発表する。	・自分が宋の政治家だったらどうするか、その立場になったつもりで考えさせる。	・宋が財政難に陥った原因について理解し、その対策について考察している。 【思考・判断】 〔ノート、発表〕
まとめ	5分	・本時のまとめ	・次時は、財政難に対して宋がとった対処について扱うことを予告する。	

(3)実践の概要

実践１では、宋で文治主義が行われた理由とその影響について、発問を中心に授業を構成した。生徒には、発問に対する自分なりの考えをノートに記入させた後、近くの人と相談して考えを深めさせ、何人かを指名して発表させた。他の生徒の考えや教師の説明は、自分の答えとは区別してノートに書くように指示した。授業の後には、毎回ノートを回収し、生徒の記述を評価するとともにコメントを書き加えて返却した。

今回は最初の実践であったため、できるだけゆっくり丁寧に進めるようにした。特に授業前半の発問①、②は、時間をかけて説明し、考える時間をとった。生徒の多くは、教師の指示を聞いて、戸惑いながらも自分の考えを記述していたが、何も書けない生徒も数名見られた。授業の後半では考えたり発表したりする時間が十分とれず、発問③以降は無記入が多くなってしまった。以下に、生徒の主な記述内容を示す。

《発問①》
・権限を縮小すれば（皇帝が）殺されないから国が安定する。
・節度使の権限を大きくしたら皇帝も倒す野心をもってしまうから。
・節度使の権限を縮小することにより、皇帝の命令を行き渡らせるようになれば、国の安定、皇帝の独裁が出来るようになる。
・これ以上皇帝を倒すような節度使を出さないため。
・皇帝がまた殺されないように、節度使の立場を低くし、皇帝よりも上の地位に立たせないようにするため。
《発問②》
・合格できたのは最終的に皇帝のおかげだから、「じゃあ、皇帝のために頑張ろう！」ってなる？
・皇帝の命令をよく聞く人が採用される。皇帝が信頼できそうな人を自分で選べる。
・皇帝が認めることにより、皇帝に尽くそうとしてくれるから。皇帝のために必死で働かせるため。
・君主と官僚の間に、直接のつながりが強調され、信頼をもたせることができるから。
《発問④》
・お金をあげる。土地や食糧をあげる。
・話し合いをする。和平を結ぶ。
・貿易する。
・仲良くなって味方につける。
《発問⑤》
・銀や絹などの高いものをあげてばっかりいたから、お金がなくなる、物もなくなる。
《発問⑥》
・農民からお金をまきあげる。
・新しい法律や制度をつくる。
・お金を作る。

実践２　**東西の文化交流（モンゴル帝国）**

(1)本時の目標

13～14世紀の、モンゴル帝国を中心とするユーラシア大陸の東西交流について理解し、キリスト教諸国がモンゴル帝国へ使節を派遣した理由について考える。

(2)本時の指導計画・評価計画

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価計画 〔評価計画〕
15分	○東西文化の交流 ・13～14世紀の世界情勢を確認する。 《発問①》この時期にキリスト教諸国がモンゴル帝国へ使節を派遣した目的は何か。 ・自分の考えをノートに記入して発表する。	・西ヨーロッパとイスラーム世界との十字軍以後の関係を踏まえて考えさせる。	・当時のユーラシア大陸の情勢を踏まえて考察している。 【思考・判断】 〔ノート、発表〕

(3)実践の概要

実践２では、キリスト教世界からモンゴルに使節が派遣された理由について考えさせた。授業全体を発問を中心に組み立てることが難しかったため、15分程度、課題追究学習の時間を設定した。短い時間であっても、生徒に課題について考えさせ、その結果を自分なりに文章で記述させ、教師がそれを評価するということを、何回も繰り返し行うようにした。

発問に対しては、最初は「使節」という言葉から遣唐使を連想した解答が多かった。教師が、イスラーム諸国に対してキリスト教国の力だけでは対抗しきれなかったことを説明したところ、同盟や挟撃を目的とするという解答を導くことができた。考察させる際に、その手がかりとなる知識やヒントを、どの段階でどの程度示すかということが課題であると感じた。

以下に生徒の主な記述を示す。

《発問①》（無記入８名）
・モンゴル帝国を知るために使節を送った。
・戦術とか、どうして自分たちが苦戦した相手を倒せたのか聞くため。
・ヨーロッパが勝てなかったイスラーム諸国を倒したモンゴル帝国がどんな戦いをして勝ったのかを調べて取り入れようとした。
・イスラームへの攻撃を手伝ってもらうため。協力してもらってイスラーム諸国を倒すため。
・同盟を結ぶため。
・モンゴル帝国に自分の国を攻めないよう頼む。

実践３　**イスラーム世界の成立と発展**

(1)本時の目標

イスラーム世界の成立と発展の過程について理解するとともに、ムハンマドが短期間でアラビア半島を統一できた理由を考える。

(2)本時の指導計画・評価計画

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価計画 〔評価方法〕
15 分	○ムハンマドの活動 ・ムハンマドのアラビア半島統一までの過程を確認する。 《発問①》ムハンマドがアラビア半島を短期間で統一できたのはなぜか。 ・自分の考えをノートに記入して発表する。	・メディナの人々をイスラーム教でまとめメッカ占領に成功したことに留意させる。 ・ヒジュラからメッカ占領まで８年かかったのに対し、メッカ占領から半島統一までは１年余りである。この事に注目させつつ考察させる。	・ムハンマドのアラビア半島統一までの過程を踏まえて、具体的な根拠のもとに理由を考察している。 【思考・判断】 〔ノート、発表〕

(3)実践の概要

実践３では、ムハンマドがアラビア半島を短期間で統一できた理由について考えさせた。**実践２**「モンゴル帝国」と同様、考察する手がかりとなる知識や着眼点を示すことにより、生徒はある程度すんなりと課題に取り組むことができた。今回は、日本とアラビア半島を比較させ、「日本よりもはるかに広大な半島を短期間で統一できた秘訣は何だろうか」と問いかけた結果、生徒は、軍事力以外の宗教の力について気付くことができた。間違いや失敗を怖れて消極的になりがちな生徒の実態を踏まえ、思考を誘導し解答が画一的になる面はあるが、学習意欲を喚起するためにも、手がかりを提示することが必要と考えた。

以下に、生徒の主な記述を示す。

《発問①》（無記入６名）
・630年にメッカを占領した実績があり、アラビア半島の人々がムハンマドについてきた。
・メッカ占領成功をきっかけに、ムハンマドの言うこと＝神の言ったことをやったら成功したと人々が思い、ムハンマドの言うことは正しいと思うようになり、口コミで広がった。
・アッラーのお告げでムハンマドはメッカを占領できたので、人々は彼を神の使者だと思った。
・アッラーを信じていれば勝てると言うことが人々に強く根付いたから。
・ムハンマドがアラビア半島で布教しまくった。

実践４　**フランク王国の成立と発展**

(1)本時の目標

フランク王国の成立と発展の要因について、ローマ教会の発展と関連させて考察し、理解する。

(2)本時の指導計画・評価計画

段階	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価計画 〔評価方法〕
導入	5分	○前時の復習 ・ゲルマン人の移動とその後の展開を確認する。	・東ゴート族・ブルグント族が短命であった原因を再確認させる。	
展開	40分	○フランク王国の成立 ・クローヴィスがアタナシウス派に改宗した理由と影響を考える。 《発問①》クローヴィスがアタナシウス派に改宗したのはなぜか。 ○ローマ教会の成立 ・西方と東方のキリスト教会の状況と、聖像禁止令について説明を聞く。 《発問②》ビザンツ皇帝の圧力に対し、自分がローマ教会の指導者だったらどのような対抗措置をとるか。 ・自分の考えをノートに記入して発表する。 ○フランク王国の発展 ・トゥール＝ポワティエ間の戦いでのカール＝マルテルの活躍の意味を考える。 ・カロリング朝の成立 《発問③》ローマ教会やフランク王国の住民は、カロリング家とメロヴィング家のどちらに期待すると思うか。 《発問④》ピピンの王位簒奪が成功したのはなぜか。 ・自分の考えをノートに記入して発表する。 ・ピピンの寄進について説明を聞く。	・考察させる材料として、東ゴートとブルグントの状況、フランク王国の人口構成を示す。 ・ローマ教会は、政治的な後ろ盾がなく苦しい状況であったことに着目させる。 ・カール＝マルテルの活躍がなければ、フランク王国やローマ教会はどのような状況になっていたのかを想像させる。 ・ここまでの学習内容を踏まえて記述させる。 ・王位を支持してくれた感謝の気持ちであることを指摘する。	・具体的な根拠に基づき理由を考察している。 【思考・判断】 〔ノート、観察〕 ・政治状況や背景を踏まえて考察し、自分なりに表現している。 【思考・判断】 【資料活用の技能・表現】 〔ノート、発表〕
まとめ	5分	・フランク王国の発展とローマ教会の意図を結び付けて理解する。		

(3)実践の概要

実践４では、フランク王国の成立と発展について、発問を中心に授業を構成した。生徒は、**実践１**「宋の成立」に比べて、課題に対して自分の考えを記述するという学習に慣れ、抵抗がなくなってきたようだ。書くのに要する時間が短縮され、無記入の生徒も減少した。

《発問①》では、フランク王国以外のゲルマン諸国の失敗例を踏まえ、改宗による政治的な効果について考察させた。多くの生徒が「住民との協力関係を構築するため」という事に気付いた。《発問④》では、カロリング家の功績とローマ教会の立場、そしてメロヴィング家が支持を失っていた政治状況とを総合して考えさせたかったが、全てに言及できた解答はなかった。複数の事項を結びつけて結論を導くことはまだ難しく、今後更に習熟が必要だと感じた。

以下に、生徒の主な記述を示す。

《発問①》（無記入０名）
・ローマ人が国の人口のほとんどを占めているので、アタナシウス派にした方が国もまとまりやすくなるから。
・アタナシウス派のローマ人が人口のほとんどを占めているため、ローマ人とのトラブルをなくすために改宗した。
・97％を占めるアタナシウス派の人をまとめるのは大変だから。
・アタナシウス派にすれば味方が増えるから。
・アリウス派を信じているフランク人は少ないので、すぐ変えられる。
・住民同士のトラブル・反発を起こさないため、住民に合わせて宗教を変えた。
・アリウス派だったら内戦が起きる。
・東ゴートのようにならないため、宗教をまとめようとした。
《発問②》（無記入３名）
・ローマ教会はビザンツ帝国の圧力に対抗するために、ビザンツ帝国より強い国を味方にしようとした。
・フランク王国の力を借りて対抗できるようにする。
・信者の力を合わせてビザンツ帝国の圧力をはね返す。
・ビザンツ皇帝に使者を送ってゲルマン人への布教の大切さを訴える。
・表では聖像を使って布教することをやめて裏で隠れて聖像を使い布教する。
・レオン３世に聖像を認めさせる。
《発問④》（無記入３名）
・カロリング家はトゥールポワティエ間の戦いで勝利したことから、メロヴィング家より住民を味方につけることができたから。
・実績がカロリング家にあって、メロヴィング家は国が不安な中何もしなかったこともあって、民はキリスト教をカロリング家のおかげで続けられたので、民に異議がなかったから。
・カロリング家への期待がかなり高まっていたから。
・教会（教皇）が支持（教会を救ってくれたお礼）。
・キリスト教を守ったカール＝マルテルの子だから。
・ピピンが有能だったから。
・メロヴィング家は無力だから、いても仕方がないので追放。
・人々が期待していたのに親（カール＝マルテル）が何もしなかったから、子供がやった。

4　アンケート結果

実践４「フランク王国の成立と発展」を終了した後に簡単なアンケートを実施した。結果は以下のとおりである。

○次の①～⑤から、自分に最もあてはまるものを１つ選んで下さい。

①書くことに対する抵抗感がなくなった	15名
②以前よりいろいろな材料をもとに書けるようになった	９名
③何か書いてみようと思うようになった	６名
④変化なし（もともとできていた）	２名
⑤変化なし（できないまま）	３名

○授業で考える時間をとって学習することについての感想（自由記述）

・どういった経緯で事件が起こったのかわかり、覚えやすい。
・自分の意見と答えを比べることで違いを見つけることが出来、理解しやすい。
・自分の考えを事前に書くことで考えがまとまる。突然答えろと言われると上手く言えない。
・自分の意見やみんなの意見を聞くことが出来る。
・授業内容が理解できると思う。
・自分で考えて書いた方が覚えやすい。
・前に書いてあったノートを見るのが楽しい。
・あまり世界史は考えることがないから、考えられていい。
・考える時間があると集中できると思う。
・続けていたら自分の成績が上がった。
・自分のためになる。答えを書くことが楽しくなった。
・苦手。
・もっと続ければ自分が変われるかもしれない。

何かを書いてみようと思うようになったり、書くことに対する抵抗感がなくなったとする生徒が約60%、いろいろな材料をもとに書けるようになったとする生徒が約25%であった。

本実践によっても「以前と変わらず書けないまま。」とする生徒も３名いたが、自由記述に「もっと続ければ変われるかもしれない。」と書いている生徒もおり、書けないからと言ってあきらめない姿勢が見られた。

5　まとめ

(1)成果

今回の実践を通して、生徒は、歴史的事象の背景・理由やその結果について、具体的な根拠に基づいて考え、自分の言葉で表現することが、少しずつではあるができてきたといえる。数か月にわたって、発問に対して考え、記述する学習活動を継続的、反復的に行うことにより、生徒は、自分で考えることや書くことに対する抵抗が薄れ、スムーズに取り組めるようになった。

アンケートで「書くことに対する抵抗感がなくなった。」、「以前よりいろいろな材料をもとに書けるようになった。」と回答した２名の生徒について、考察がどのように変化したか、次の表に示した。

アンケートの回答	**実践１**《発問①》 節度使の権限縮小目的（６月）	**実践４**《発問①》 アタナシウス派への改宗理由（11月）
生徒Ａ 「書くことに対する抵抗感がなくなった」	無記入（板書を写すのみ）	ローマ人の人口の方が多いからまとめやすい。
生徒Ｂ 「いろいろな材料をもとに書けるようになった」	皇帝を殺して自分が皇帝になろうと出来なくなる。	アタナシウス派のローマ人が多数を占めているため、ローマ人とのトラブルをなくすために改宗し国をまとめやすくする。

生徒Ａは、**実践１**では無記入であったが、**実践４**では自分なりの考えを書いている。また、**生徒Ｂ**は、**実践１**では考察の根拠を書いていなかったのに対し、**実践４**では根拠を明示して理由を書けるようになった。

このように、生徒のノートをもとに記述内容を評価した結果、回数を重ねるに従って、根拠を示して理由を述べられるようになったり、文章量が増えたり、無記入が減ったりしたことが分かる。

教師の指導技術という点でも、問いかけの仕方や、考察の手がかりとなる根拠の示し方、示すタイミングなど、生徒の学習活動を活発にするための働きかけが、効果的に行えるようになってきたと感じる。発問する際、その数時間前の授業で、発問の伏線となる事項をきちんと押さえておくというような準備を意識して行うようにもなった。実践を反復的・継続的に行ったことは、教師の指導技術の向上にもつながったといえる。

また、生徒は、自分がその立場だったらどうするかという問いかけに対して、問題を自分に引きつけて考えようとしていた。世界史は自分と無関係な世界の出来事ではなく、同じ人間がつくってきたものであることを感じ、興味をもつきっかけとなったといえる。

さらに、発問に対して積極的に考えようとする態度も徐々に身に付いてきた。授業の後に、必ず一人一人のノートを提出させ、評価しコメントを加えて返却したことは、生徒を励まし自信をもたせ、取り組みを促す効果があった。

以上のことから、歴史を原因と結果のつながりとして捉え、歴史的事象を歴史的文脈の中で理解する力を育成するというねらいは、ある程度達成できたと考える。

(2)今後の課題

考察させる際に、考えるヒントや材料を教師から数多く提示したことは、生徒に自由な発想をさせるという点で課題があった。教師が生徒の思考を誘導していた面があり、生徒の解答もおおむね教師の意図したものから大きくはずれることはなかった。生徒は、自信のなさや、間違いや失敗を恐れるあまり、指名されても答えないことが多いので、生徒の考えたり答えたりしようという気持ちを高めるためには、ヒントを与えることが有効であると考えた。今後は、より少ない手がかりをもとに考えていけるよう、継続して指導する必要がある。

また、生徒によって解答の質にばらつきが多く、その差は徐々に拡大してきた。論理的に解答できる生徒が増えてきた一方、思いつきだけで安易に答えている生徒が少なくない。苦手意識を強く持っている生徒も多い。発問内容や考える材料の提示方法を一層工夫して、生徒の取組を促す働きかけが必要である。